

大塚敬節
矢数道明
責任編集

世漢方医学書集成

14

永富独嘯庵
山脇東門
龜井南冥

名著出版
刊



南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 第I期・全30巻

ISBN4-626-00072-X C3347

近世漢方医学書集成 14

永富独嘯庵
山脇 東門
龜井 南冥

第I期
全30巻

昭和五十四年六月二十二日 第一刷発行
昭和六十年十一月二十五日 第三刷発行

編者 大塚 敬節

発行者 中村 安孝

発行者 株式会社 名著出版

東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八一五)一二七〇番代
振替口座 東京七一三〇七九番

製版所 株式会社 日本写真製版所

印刷所 有限会社 伊藤印刷

製本所 株式会社 辻本製本



予約限定版

落丁本・乱丁本はお取替えします。

ISBN4-626-01207-8 C3347

責任編集

大塚敬節

矢数道明

編集委員

山田光胤

寺師睦宗

大塚恭男

矢数圭堂

松田邦夫

而告昭 善哉 何惜之

文隆之潛二十年 終憂時獻而

去而後文 足下猶於彼元階是幸

也長壽遇世 卽足一畝事父 畝事母親

斯世之志 入詠頌生 古微者 詠詩 經 卷

贈 謝靈運 古人 天賜 又幸 小歲 作 五年 之

長 沙 氏 之 方 思 誠 之 書 十 手 錄 未 面 謝

道 之 間 便 將 樂 只 終 身 也 昔 曰 良 音 材

之 云 之 者 有 簡 之 音 知 二 技 不 法 得 吾

而 之 易 揮 之 難 士 情 之 有 物 乃 順 逆

所 如 少 五 聲 序 抑 逆 勿 為 毀 譽 所 移

白 雲 自 富 折 足 而 門 謂 之 真 下

此 世 中 豈 窮 天 得 之 足 下 夫 惠 謝

稻 晴 甚 煩 首 謹 思

小 石 元 從 足 下



山脇東門肖像



亀井南冥還暦の記念書



亀井南冥自画賛

凡 例

一、本書第十四卷には、『漫遊雜記』『吐方考』（永富独嘯庵）、『東門先生隨筆』（山脇東門）、『古今齋以呂波歌』『南冥問答』（龜井南冥）を収録した。

一、本書は全て影印版によって収録したが、影印にあたっては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮少し、一頁に半丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、版本の場合、本文中の蔵書印及び所蔵者による書き込み等は、全て省略した。但し、写本の場合はその限りではない。

ホ、印刷不明な箇所は、他の版本により補正したところもある。

一、底本は次の通りである。

漫遊雜記 版本（文化六年版） 二卷二冊（矢数道明所蔵）

吐方考 版本（宝暦十三年版） 一冊

東門先生隨筆 矢数道明所蔵写本一冊

古今齋以呂波歌 版本（天保十年版） 一冊（京都大学附属図書館蔵）

南冥問答 版本 一冊（大塚敬節所蔵）

一、解説は、寺師睦宗（日本東洋医学会副会長）が執筆した。

一、巻頭の口絵は、中野操氏所蔵・永富独嘯庵書牘、藤浪剛一著『医家先哲肖像集』（昭和十一年、刀江書院）収録・山脇東門肖像、「亀陽文庫」所蔵・亀井南冥遺墨によった。

解 説

寺 師 睦 宗

永富独嘯庵

永富独嘯庵の名声は日本医学史上に永遠不滅であろう。彼の生涯はわずか三十有五年の短いものであったが、波瀾万丈、国手として古医道に、西洋医学に、儒学に、はたまた禅に、若い情熱と卓抜な見識とを示した。ただ天の時、地の利を得ず、また健康にすぐれなかったため、未完の大器として終わったけれど、彼の抱懷した大理想、先覚者としての卓見、たとえば病理解剖の必要性、癌の外科手術など、いま少し天寿に恵まれていたならば、必ずや立派な成果をみたに相違ない。また経世家として時勢に際会せしめたならば、必ずや古今まれにみる良相となったに相違

ない。幕末の風雲に遭会せしめたならば、同郷の吉田松陰や高杉晋作以上に名声をとどろかしたであろう。彼が江戸泰平の時代に生をうけたことは、ひとつの宿命であった。

独嘯庵は名を鳳介、字を朝陽と称し、長門に享保十七年（一七三二）に生まれた。初代米大統領ワシントンもこの年に誕生。儒学者勝原翠翁の三男。幼年時代より聡慧で、十三才の時に赤間関の医師永富友庵の養子となった。

同郷の山県周南に儒学を学んだ後、京都に赴き山脇東洋に師事し、古医方たる漢方医学と近代医学の解剖学を修得し、さらに越前の奥村良筑に吐方を学んだ。その後、当時の文化都市長崎へ留学し、西洋医学に着目した。

東奔西走、南船北馬の後、独嘯庵は宝暦十二年（一七六二）三十一才の暮、大阪の地に腰を落着け、医業の傍ら著述に従事した。が、健康にすぐれなかった彼は寒疝（泌尿器系の結核性疾患）を病み、明和三年（一七六六）三月五日、「御定の死生命あり、老仏の不生沙汰何かせむ、いづれもさらば千万」の絶筆を残し、永遠の眠りにつく。時に僅か三十五才の若さであった。藏鷺庵に葬らる。著書に『漫遊雜記』『囊語』『吐方考』『微瘡口訣』がある。

漫遊雜記

漢方中興の医傑吉益東洞をして「陰として一敵国の如きものはこれ独嘯庵か、吾れ死せば將に



独嘯庵二百周忌追遠祭
(昭和40年 3月21日)



昔日の永富独嘯庵の墓(大阪・藏鷺庵)
富士川游訳解『漫遊雑記』昭和15年刊より



富士川游訳解『漫遊雑記』より
永富独嘯庵書(京都・佐伯理一郎氏蔵)

この人を以て海内医流の冠冕^{かんべん}となすべし」といわしめた永富独嘯庵こそ、本当の「国を医する手」を持った済生活人の国手ではなかったか。

われわれの胸琴を永遠に奏でてくれる国手独嘯庵の烈々たる精神や、人となりや、治術を知るのに最もよい書物は、『漫遊雜記』である。

本書の巻頭に、漢方医学の古典たる傷寒論に対する独嘯庵の見解を述べている。

「凡そ古医道を学ばんと欲する者は、当にまず傷寒論を熟読すべし。而して後、良師友を選びてこれに事え、親しくこれを事実^{じじつ}に試むること若しくは五年、若しくは十年、沈研感刻して休まざるときは則ち自然に円熟するなり。而して後、漢唐以下の医書をとつてこれを読むときは則ちその信妄良窳^{りょうこう}、猶ほ明鏡にかけて奸慝^{かんし}を弁ずるがごとし。然らざるときは則ち億万巻の書を読み尽すと雖も、要するに術に益なし」。

彼は、「古医道を学ぶには、まず傷寒論を熟読すべきである。然る後、良師友につきこれを事実^{じじつ}に試みよ。そうでなければたとえ億万巻の医書を読んでも、それは耳学門で無用の長物となろう」と切言している。

古医道の術は、「診候わずかに失するときはその病愈えず、それ故、精審すべきであり、その機宜の微妙なること、言つて諭すべからざるなり。筆して伝うべからざるなり。ただその人勤勉して以てこれを得るにあるのみ」と云う。誠に至言である。

『漫遊雜記』の中に独嘯庵の治療例が記載されている。代表例を二、三掲げてみよう。

「一婦人あり、毎年お産するけれど、子供が育たない。あるいは母胎内で死んだり、あるいは産後に死んだりするので、治を我輩に乞うた。腹診すると、巨塊あり、築々としている。そこで瀉心湯を与え、毎月二回灸をやり、厳しく房事を制した。このようにすること十カ月で無痛分娩した」。

「一花婿あり、結婚後数カ月にして暈眩を発し、隔日ごとに鼻血がでる。また潮熱して咳嗽し、脈は弦で数である。家人みな虚勞という。我輩一診して、腹証が充実している故、虚勞ではないと。詳しくその病因を本人に問うと、平生飲酒を人一倍やっていたが、結婚して以来、岳父に制約されて酒を絶った。それで気火が鬱滞したのだと。そこで我輩が大黃々連瀉心湯を与えると、三十余日にして全く治癒した」。

「一男子あり、膝脛の疼痛で三、四年も治らないので我輩に治を乞うた。脈腹証ともに異常なし。これ湿気なり、後に脚気となろうと云って、大黃附子細辛湯を投与すること百日で治癒した」。

また『漫遊雜記』の中には独嘯庵の誤治例が記載されている。「余小少にして客気多く、治方を不治の病に施して凶暴の名をとること少なからず。今その一、二を録さん」と云って、誤治の治療例を掲げている。その代表例を掲げてみよう。

「広島の一女子、咳嗽を病みて日暮に熱が高く、顴部が潮紅し、肌肉が脱落している。脈は頻で数、呼吸促迫であるが、食欲は平生の通りである。千里の路を遠しとせず、京都にきて治療を思

師山脇東洋先生に乞うた。そのとき我輩は丁度、越前の奥村良筑翁から吐方を修得して京都に帰っていたので、恩師にすすめて吐方を施さしめた。そうすると数升吐して安眠することができて、諸症ことごとく去ったようであつたが、三日の後に死んだ。

「一男子あり、腹痒を病む。その痛み激しく額に汗を生じ、四肢が厥冷している。食べるとすぐ嘔吐する。脈は沈で遅、腹診すると痛みが胸脇にまで連関している。そして小腹鞭満で、手をふれることが難しい。そこで諸医者は恐れて治療していない有様である。余は寒疝なり、死ぬようなことは決してない、と云い、附子瀉心湯を与えた。ところが夜になり、急死した。我輩はその原因を説明することができず、沈思黙考すること数日、傷寒論を読むと、所謂藏結であつた。余は当時汎然として精思せず、誤鑑かくの如し、ああ傷寒論を読むこと十五年、甚しいかな事実のあまねく難しきことや、と嘆じている。独嘯庵の真摯な学問態度に好感を覚ゆる。

医界では、よく「鬼手仏心」という言葉を使う。これは注射も手術もみな生命を全うするための仏け心にほかならないとの意であらう。独嘯庵の言行には、齒に衣きせず、自由奔放、堂々卒直に所信を述べながら、その中に大きな人間愛を感じる「鬼語仏心」と、「匠匠の心」ともいうべき名利の念を絶つた自然の心情が一貫して流れている。これが今日もなお吾々の心を強く揺り動かすゆえんの一つであらう。『漫遊雜記』の中から、その主なものを掲げてみる。

「人を山野に劫おびかしてその口腹を養うもの、これを賊という。その人を殺すこと、これを生涯に

通計するに、その多きものと雖も五十人若しくは百人に過ぎず。方今の医、術拙くして幸に時に行なわれ、知らず識らず人を戕^やうもの、これを日々に通計するに三五人なるものはけだし少しとなさず、生涯は則ちその幾千人なることを知らず。その心固より人を害するに出でずと雖も、某をして非命に死せしむるに至りては則ち一なり、乃ちその陰悪かの賊より甚しきこと無からんや。ああ仁の術、果していずくにかある、医を学ぶ者これ如何ぞ、それ畏れ且つ勉めざるべけんや」。

独嘯庵の鬼語仏心は千古の金言なり。濟生活人の医家は、病人のために心を碎きてその愁苦を救わんと勉むべきであるのに、阿諛迎合し、衣服を飾り、虚名を売り、病家を瞞し、病人を害うものにいたつては、これ盜賊の業よりも陰惡の度が甚しい。「医を学ぶ者これ如何ぞ、それ畏れ勉めざるべけんや」である。現今の医界人、須く一読し、まさに洗腸すべし。

「凡そ百技、巧に始まり拙に終わり、思に出でて不思に入る。故に巧思極まるときは則ち神妙なり。神妙なるときは則ち自然なり。自然なるものは巧思を以て得べからず。歲月を以て到るべからず。巧思を離れて得べからず。歲月を外にして到るべからず」。

「自然は神妙である。その神妙を得るには名利の心を離るべきである」、と独嘯庵は云う。これ医匠の心ともいふべきであらう。

独嘯庵は江戸時代の文化都市長崎へ百余日の間、留学した。その期間こそ短かったが、彼の修

得した洋学は門下生への大きな示唆となり、後人への西洋医学開眼となった。その模様を『漫遊雑記』は次の如く報じている。

「和蘭の医は汗吐下を能くす。宝曆壬午（一七六二）の春、余、西遊して長崎に到り、訳師吉雄について彼の医方を聞くことを得たり。その国人屍を解くことを禁ぜず、その民もまた腸を屠り、筋を絶つの惨を屑とせず。是を以て人病死して、病源明かならざれば、之を剝し視て以て後図をなす。かくの如きこと数千年、その書鬱然として存す。有志の士、考証玩索せば志業を奨励すべきものあるなり」。

長崎における独嚙庵は、西洋医学の研修が目的でなく、また時間的にみて百余日という短い期間であり、和蘭医学を深く究めつくした点においては、前野良沢、杉田玄白、大槻玄沢に一步をゆずるが、衆医に先んじて、西洋医学に着眼し、病理解剖の研究を重視すべきであると唱導したことは、良沢、玄白より以前のことであり、注目に値する点であろう。

独嚙庵の医学に対する学問の態度は、常に大所高所からこれを論じ、医術の進歩のため尊い礎石となることをもって任じていた。『漫遊雑記』にこう書いてある。

「乳癌の治せざること古より然り。而るに蘭書の中にいえるあり、曰く、その初発梅核の如くなる時、快刀を以て之を割き、後、金瘡の法に従うて之を治すと。この言、味わいあり、余いまだ之を試みずと雖も、書して以て後人に告ぐ」。